

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## Tracing the Changes in Tlingit Oral Narrative Studies : From 19th Century to the Present

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-12-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 林, 千恵子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00010005">https://doi.org/10.15021/00010005</a>

# トリングिटの口承物語研究の変遷

— 19世紀から現在まで

林 千恵子

(京都工芸繊維大学)

- |                                      |                             |
|--------------------------------------|-----------------------------|
| 1 はじめに                               | 4.2 ダウエンハウアーの口承文学研究<br>3部作  |
| 2 19世紀後半のトリングिट文化研究と<br>口承物語         | 4.3 ダウエンハウアーの研究の特徴          |
| 2.1 オウレル・クラウスの研究                     | 5 現在の研究動向                   |
| 2.2 エモンズの研究                          | 5.1 マクレラン, クルクシャンク,<br>ソートン |
| 3 20世紀半ばまでの口承物語研究                    | 5.2 歴史物語の記録                 |
| 3.1 スワントンの研究                         | 5.3 アラスカ先住民文学のアンソロ<br>ジー    |
| 3.2 デ・ラグナの研究                         | 6 まとめ                       |
| 3.3 デ・ラグナの研究の重要性                     |                             |
| 4 ノーラ・ダウエンハウアーとリチャー<br>ド・ダウエンハウアーの研究 |                             |
| 4.1 先住民の視点に立った研究                     |                             |

## 1 はじめに

本論文ではアラスカ先住民トリングिटの口承物語研究の歴史を概観するが、まずトリングिटについて簡単に説明しておきたい。ハイダ、ツィムシアンとともに南東アラスカインディアンと呼ばれるトリングिटは、人口とかつての領土面積において南東部最大の先住民民族である (Dauenhauer 2002: 62)。現在はアラスカ南東部とカナダ・ユーコン準州とブリティッシュ・コロンビア州の内陸部にコミュニティがあり人口は約24,000人<sup>1)</sup>である。人口の大半が暮らすアラスカ南東部は、流れ込む暖流の影響で緯度のわりに冬期も温暖で降雨量が多く、世界最大の温帯雨林が広がる地域である。

約1万年前からここに暮らしてきたといわれるトリングिटは、サケ・マスをはじめ、1年を通じて安定して得られる豊富な食料資源を背景に人口を拡大し、半族により構成された独特の社会制度と、クラン(氏族)のリーダーを頂点とするclass制のもとで社会を発展させてきた。

19世紀に入ると盛んになった欧米人との交易の中で、トーテムポールやカヌーやチルクット・ブランケットなど、豊富な森林資源を利用した精巧で美しいデザインの伝統工芸が注目を浴び、経済的富も手にするようになった。しかし、その一方で「白人」支配が先住民社会の脅威となった。1802年にはシトカを占拠するロシア人をトリングिटと

ハイダの合同軍が撃退するなど武力抵抗を続けたが、1867年の領土割譲条約締結以後は、米国の支配下で民族の領土や言語や伝統的生活様式を剥奪されることになった。アラスカ州独自の（公共の場所、雇用、学校などで先住民を差別する）人種差別法は1945年に廃止されたものの（Worl 2010: 210）、その後も社会における人種隔離や差別は続き（Williams 2009: 203; Rogers 1998: 132-133）、学校ではトリングット語を話せば教員から罰せられる中で（Rogers 1998: 133; Smelcer 1992: 1）、民族文化への誇りは醸成されず、言語話者の減少と伝統文化衰退が加速した<sup>2)</sup>。その後1971年のアラスカ先住民土地請求処理法（Alaska Native Claims Settlement Act）の成立や、1972年のアラスカ州議会における2言語2文化教育法の可決等、国家と州政府が大きく方針転換を図って以降、1980年にはアラスカ南東部インディアン文化の研究教育施設であるシーラスカ・ヘリテージ・インスティテュート（Sealaska Heritage Institute (SHI)）も設立され、民族の言語・文化復興に向けた活動が活発化した。重要な伝統文化である口承物語についても、SHIが中心となり、現在も物語の記録・研究が精力的に進められている。

本論文は、トリングットの口承物語の最初の体系的記録から、現在の口承物語の主要研究まで、その内容を簡単にまとめながら研究の変遷を明らかにすることを目的とする。アラスカ先住民族や北米先住民族の口承物語は、単なる娯楽にとどまらず、民族の歴史、文化や慣習、社会の規則や倫理、自然観や世界観、サバイバルのための知恵や技術を世代間で継承していくための重要な手段であり（Dauenhauer and Dauenhauer eds. 1987: 325; Silko 1986: 87）、トリングットの物語もまた同じである。しかし、他の先住民族に比べて特徴的であるのは、物語が各クランの所有財産と見なされている点であり（Dauenhauer and Dauenhauer 1995: 93）、これが研究にとって1つの問題であった。

たとえば、人間と動物等との婚姻譚は、欧米文化では現実にはありえない「神話」と見なされるが、その動物を祖先だと信じるクランにとって（Worl 2010: 201）、それはクランのアイデンティティに深く関わるものであり、同時に、その動物の紋章（クレスト）の所有権に関係する。また祖先が古代にアラスカ沿岸部へと渡ってきた移住の物語は、現在の居住地域の所有権と関わっている。そのため、部外者はみだりに語ることはできない。研究者が物語を聞き取り、それを発表するまでには深い信頼関係の構築が必要であった。結果として、トリングットの口承物語に関する出版物は膨大な数にはのぼっておらず、19世紀まで遡って俯瞰できる数にとどまっている。

本論文では、1800年代のオウレル・クラウス（Aurel Krause, 1848-1908）とジョージ・ソントン・エモンズ（George Thornton Emmons, 1852-1945）、1900年代初頭のジョン・スワントン（John Reed Swanton/Swanto, 1873-1958）、20世紀半ばのフレデリカ・デ・ラグナ（Frederica de Laguna, 1906-2004）等によるトリングット文化研究の一部としての口承物語研究と、ノーラ・マークス・ダウエンハウアー（Nora Marks Dauenhauer, 1927-2017）とリチャード・ダウエンハウアー（Richard Dauenhauer, 1942-2014）

による口承物語を焦点化した研究について、それぞれの内容と重要性を明らかにした上で、現在の研究動向を概観する。

なお、トリンギット社会の主な構成単位は、単位の大きいものから、半族 (moiety)、クワーン (kwáan)、クラン (clan)、家 (house) となっている。クワーンは、特定の居住地域に暮らす住民を指す。特に冬期の村を拠点に、いくつかのクランが管理する土地や水域に暮らす人々のゆるやかなまとまりであり、政治的権力をもたない。一方、クランは母系の家系に基づく組織で、トリンギットの最も基本的な社会構成単位となる (Thornton 2008: 43-54)。各クランは専有財産を所有するだけでなく、クラン独自の「人格」や生き方があると考えられ (de Laguna 1972 pt. 1: 451)、個人と集団双方のアイデンティティの基盤を成す。法的及び政治的権力もクランに存在し、社会政治の中心単位である。

## 2 19世紀後半のトリンギット文化研究と口承物語

### 2.1 オウレル・クラウスの研究

トリンギット文化について最初の体系的記録を発表した1人がオウレル・クラウスである。1881年、オウレル・クラウスとアーサー・クラウス (Arthur Krause) 兄弟は、ドイツのブレーメン地理学会 (Bremen Geographical Society) から、シベリア西部とチュクチ半島及びベーリング海峡沿岸地域の調査目的で派遣された。調査終了後、帰国の途に着く前にアラスカで冬を過ごすことに決めた2人は、北米北西沿岸部インディアンについて知見を深める目的で、トリンギットの村クルックワン (Klukwan) に滞在した。アーサーが帰国後も、オウレルはクルックワンに残り集中的に調査を実施した。その結果をまとめたものが『トリンギット・インディアン (*The Tlingit Indian*)』(Krause 2013 [1956])<sup>3)</sup>である。

この書の特徴づけているのは、調査を実施した時代の希少性と、網羅的内容である。まず、調査がなされた1881～1882年はアラスカ南東部が米国支配下にあったものの、米国人人口は少なく、トリンギットの伝統文化がまだ禁止や統制を受けていない時代であり、本書は当時のトリンギット社会の様子を詳細に伝えている。

また、地理学者としての専門教育に裏打ちされた、網羅的でありながら、詳細で客観性に優れた記述が一つの特徴となっている。たとえば、センサスや過去の記録を活用して、南東部の気象 (例えば、平均気温、平均降雨量、降雨日数) (Krause 2013 [1956]: 76) など、現在と比較しやすい情報が記載される一方、交易品の種類や価格 (Krause 2013 [1956]: 168) なども記録され、当時の社会状況を克明に伝えている。

この包括的内容の中で「トリンギットの神話」にも1章が割かれている。現地で実際に聞いた物語について、ロシア人司祭イワン・ヴェニアミノフ (Iwan Weniaminow) に

よる記録も参照してまとめられている。ワタリガラスの誕生と人類を滅亡させる洪水の物語、ワタリガラスによる天地創造（口から零れ落ちた水滴によってできる河川や海の物語、3つの箱に閉じ込められた太陽、月、星をワタリガラスが解放する物語）、雷や地震の起源、そしてクマと結婚した娘の物語などが記録されている（Krause 2013[1956]: 215-237）。

また、クラウスは聞き取り調査によってではなく、チルクートの交易所で盲目の老人が聴衆に向けて語った物語を聞いたとして、その様子を伝えている。冬の夜に集まった聴衆たちが、語り手の物語に耳を澄ませ、ワタリガラスの狡猾な策略やみだらな冗談では遠慮のない大笑いが起こって話が中断した様子（Krause 2013[1956]: 216）など、物語が当時の社会でどのように語られていたかを伝える貴重な記録となっている。

## 2.2 エモンズの研究

19世紀のトリンギット社会と文化の貴重な記録を残したもう1人の人物として、エモンズが挙げられる。その業績の中でも特に注目すべきは、30年以上にわたる研究成果として残した未完の原稿と膨大なメモ類を、トリンギット文化研究の第一人者デ・ラグナがさらに30年をかけて修正、加筆、再構成した『トリンギット・インディアン (*The Tlingit Indians*)』（Emmons 1991）である。著者エモンズの民族文化に対する偏った考え方<sup>4)</sup>を残しつつ、1890年代のトリンギット社会の克明な記録をデ・ラグナが20世紀の研究知見に照らして修正した、貴重な「共著」となっている。

エモンズは当初は米国海軍中尉として、1894～1899年には米国艦船ピンタ号の副艦長としてアラスカ南東部海域に駐留した。19世紀後半のこの地域では、米海軍将校は米国法規の体現者として現地事件の裁定や、先住民同士や先住民と「白人」のトラブル仲裁に従事し、必要なときは罪人への刑の執行や治安維持のために上陸していた。人々の利害と深く関わるこの任務によって、エモンズはトリンギットの人々と親密な人間関係を築き（Emmons 1991: xvii）、それを基盤に研究を発展させた。エモンズの立場は、同時代の研究者に比べると極めて有利であったといえる。海軍の任務によってトリンギットの居住地すべてに上陸することも長期滞在も可能であるだけでなく、海軍将校として人々から敬意をもって遇される存在でもあった（Emmons 1991: xxiv; xxviii）。

トリンギット文化研究におけるエモンズの大きな功績は、伝統工芸研究への貢献であった。現在、米国の主要博物館でエモンズが収集した標本を所蔵しない機関はない（Emmons 1991: xix）。アメリカ自然史博物館が世界最大のトリンギットのコレクションを所有するが、これに米国やカナダの主要博物館の収蔵品を加えると、エモンズから購入されたコレクション総数は推計11,000点以上にのぼる（Emmons 1991: xix）。収蔵品すべてにトリンギット語の名称や由来、機能、素材に関する丁寧なメモが付されており、エモンズの伝統工芸に関する理解の深さをうかがい知ることができる。

そして、研究成果の集大成となるはずが、エモンズの死によって未完となったのが『トリンギット・インディアン』であり、編纂の役割を担ったのが後の世代のデ・ラグナであった。デ・ラグナは、エモンズの記載をすべて残しながら、その直後に [ ] を付け、彼が誤っている場合は詳細な説明とともにそれを修正・補足した。また、著書全体の構成や内容も見直し、エモンズの意図した目次も変更し、章によっては削除し、重要な内容を付け加えるなど大胆な修正を加えている。

エモンズは、1909年にスワントンの口承物語研究書が出版されると、出来上がっていた神話の章を削ってしまったが、デ・ラグナはこれを本書に復活させている (Emmons 1991: 177-179; 388-391)。ただし、扱われている物語の数自体は少なく、内容もエモンズが関心を寄せていたシャーマニズムに偏っているなど体系だってはいない。

しかし、本書の重要性は、物語内容に関わる生業や食習慣や埋葬の儀式等の文化的背景が、スケッチや写真も加わり、具体的に伝えられている点である。たとえば、狩猟採集については、クマ用の仕掛け罠 (Emmons 1991: 134-135) やラッコやアザラシ用のヤスや銛のスケッチ (Emmons 1991: 111; 123), 1880~1890年代のニシンの卵採取の写真 (Emmons 1991: 148) をはじめ、物語で語られる伝統的生活様式を具体的に理解するための貴重な資料を提供している。

### 3 20世紀半ばまでの口承物語研究

#### 3.1 スワントンの研究

クラウスやエモンズが包括的内容の著作を発表したのに対して、文化的背景については別の著作 (Swanton 1908) にまとめながら、口承物語のみに焦点を絞った研究書を出版したのがジョン・スワントンである。スワントンは、2年間フランツ・ボアズの下で学び、後にアメリカ南東部インディアンのスー語族やマスコギアン語族の歴史、文化、宗教、言語などあらゆる側面を記録して歴史人類学的手法を発展させた (Encyclopedia Britannica Online)。

スワントンが発表した『トリンギットの神話とテキスト (*Tlingit Myths and Texts*)』 (Swanton 1909) は、1904年1月から4月の3ヶ月間に、シトカとランゲルの2ヶ所で聞き取った物語を収めた「口承物語全集」である。クランのチーフや、神話に最も精通した年長者等から聞き取った物語106篇について、詳細な筋書きが説明され、18篇にはトリンギット語も併記され、巻末には各物語の概要 (アブストラクト) が付されている。

物語の配列も合理的で、ワタリガラスの天地創造の物語で始まり、最後は「死者のためにトーテムポールが建立された宴で行われたスピーチ」で締めくくられている。ワタリガラスの物語が語られるのが、まさに死者のためのメモリアル・ポールを建立するときであり (Swanton 1909: 374), 吊いの儀式の中でチーフが物語を語り、聴衆が応答す

る様子が記録され、物語の内容だけでなく、語りの方法が示されている。同時に、ポールの建立や踊りなど、儀式の進行過程も記録され、トリンギット社会で物語がどのように活用されているかが示されて幕を閉じる。

106篇の物語内容の内訳は、ワタリガラスの創世神話に加えて、クランの紋章の由来に関する物語、クランの移住の歴史、地名や土地所有に関する物語、地域間（北部と南部）の戦争史、飢饉や餓死の物語（例えば、コッパー・リヴァーの冬の飢饉）などが多くを占める。

紋章の由来に関わる物語は、なぜそのクランが特定の動物（例えば、ビーバー、グリズリー、サケ、カエル、ハクチョウなど）を紋章としているのかを説明するものだが、物語に共通パターンがあることを示している。すなわち、主人公が特定の動物に対して侮辱的発言や怒らせるような行動をした結果、その動物の一族に連れ去られ、自分を拉致した生き物と共に暮らして結婚する、あるいはその一族となるという展開である。このような異類婚姻譚だけでなく、ビーバーを自分たちの都合で大量に殺した人々が全員溺死する（Swanton 1909: 219-220）など、自然界への敬意のない言動が悲劇的結末につながることを教える物語が多い。

スワントンのこの物語集では、最後のスピーチ以外では「声」の部分が伝えられていないものの、物語の要素や展開を詳細かつ明瞭に説明しているため、106篇の集積によって、トリンギットの口承物語を俯瞰することを可能にしている。物語の共通項から、一定のパターンや、民族特有の倫理感や自然観、世界観を探ることが可能であり、分析研究に重要な資料を提供することになった。また、多くのトリンギット語話者がまだ健在であった時期に聞き取りが行われている。20世紀半ばにはトリンギットが英語話者となり、物語を正確に記憶している人が激減する中で、『トリンギットの神話とテキスト』は物語の正確な内容を参照できる記録として、またかつて存在した多くの物語の記録として最も重要な基本研究書となっている。

### 3.2 デ・ラグナの研究

20世紀半ばにトリンギット文化研究を大きく発展させたのがデ・ラグナである。デ・ラグナはアングーンでの調査をもとにした『トリンギット社会の物語 (The Story of a Tlingit Community)』(de Laguna 1960)、ヤクタートでの調査をもとにした3巻の大著『セント・エライアス山のもとで (Under Mount Saint Elias)』(de Laguna 1972)を上梓し、先述のエモンズの未完の大著 (Emmons 1991) も完成させた。

『トリンギット社会の物語』は遺跡や岩面彫刻、発掘された石器や武器など考古学的資料をもとにアングーンの古代史を証明するとともに、口承物語を歴史資料として用いて、アングーンの先史時代から現代までの歴史も明らかにしたものである。また、『セント・エライアス山のもとで』はヤクタートの地理、気象、生態系、衣食住の状況、交易、生

業、社会制度、芸術、戦争、医療とシャーマニズム、コスモロジー、神話と物語等、包括的内容について精密に述べている。

デ・ラグナの著作では、神話として扱われる物語がある一方で、歴史資料として重視されている物語も多い。「トリンギットの物語は本質的に歴史に関係する」(de Laguna 1972 pt. 1: 210) として、真実の出来事を語っていると考えるからである。

デ・ラグナは、「白人」と先住民それぞれの視点から見た時代区分の折衷案<sup>5)</sup>を用いながら、神話時代から18世紀後半までのことを語った約20篇の物語を用いて、アングーンの歴史を明らかにしている。

先住民の歴史観に沿って物語を用いる場合、たとえば、クランの起源を表す物語は、人間と動物等との婚姻譚であり、これを過去の事実として扱ってよいのかは問題となる。デ・ラグナは、トリンギットの不変の秩序を構成しているのがクランであり、クランとは何かを表す物語を省けば、トリンギットの不完全な歴史文化を表すことになる主張する。また、欧米の歴史観から考えてもアングーンやヤクターの歴史を示そうとすれば、歴史の行為者であるクランとは何者かを明らかにする必要があるとして、動物等との婚姻譚を歴史物語に含めている (de Laguna 1972 pt. 1: 211)。

デ・ラグナが記録した歴史物語の1つの特徴は、戦争に関する物語が多い点にある。物語からは1915年以前にはクラン同士の激しい戦闘や殺戮が繰り返されていたことが分かる。たとえば、「シトカにおける和平パーティーでのランゲルの人々の大虐殺」と題された物語では、1852年にシトカのカグワンターンというクランが和平のダンスパーティーを開催して、ランゲルの人々を招待しながら、だまし討ちにした様子が語られている。着飾って武器を持たない人々の殺害の壮絶な様子と、ランゲルの戦士の首が切り取られてシトカで現在も大切に保存されていること等が語られている (de Laguna 1960: 155-157)。また、1882年の米海軍によるアングーン砲撃事件について、その経緯や背景が、「白人」の文献資料と先住民の主張を対比させて、双方の視点で述べられている (de Laguna 1960: 158-172)。

### 3.3 デ・ラグナの研究の重要性

デ・ラグナによる研究の重要性については主に2点を指摘することができる。第1に、トリンギットの物語の本質や役割を正確に理解し、欧米文化の価値基準との違いをふまえて解説した点にある。トリンギットの物語は本質的には歴史的なものであり、真実を語るものだとデ・ラグナは指摘する。語る目的がたとえ娯楽であったとしても、真実を語るという前提に立っている。トリンギットにはフィクション (fiction) に相当する物語のカテゴリーはなく (de Laguna 1972 pt. 1: 210)、物語に関する基本的な認識に、欧米文化とトリンギット文化では大きな違いがあることを示した。

また、物語は、内容に関係するクランのみが語ることが可能であり、部外者はアウト



ラインしか知ることはできない (de Laguna 1960: 17) という物語を語る権利についても明らかにした。物語はポトラッチで披露される歌やスピーチ (演説) の基礎になるものであり、クランのチーフは自らの富を犠牲にしてポトラッチ開催の特権を手にしてるので、物語を語る権利をもつことが当然だと考えられている (de Laguna 1960: 17)。また、コミュニティ内で語られない物語も存在する。たとえば、クラン同士の闘いの物語は、該当するクランの人々がいる場で話せば侮辱だと解釈され、対立を再燃させる挑発的行為となりうるため、自由には語られない (de Laguna 1960: 17)。ただし、部外者のデ・ラグナには語る事ができたと思われ、コミュニティの平和のために封印されてきた多くの貴重な物語が彼女に継承された。

デ・ラグナによる研究の第2の重要な特徴は、トリングットの時間のとらえ方の指摘であり、最近の研究潮流の端緒となるものである。たとえば、欧米文化では、歴史を直線的な時間軸の中でとらえ、現在から切り離された過去の出来事だと考えるのに対して、トリングットは歴史を場所によって認識すると指摘している (de Laguna 1960: 21)。たとえば、日常生活の中で目にする岩は、物語に登場するワタリガラスが形作った岩であり、或る山は歴史上の大洪水の際に人々が避難した山である。また、個人の名前はある特定の歴史的出来事に由来しており、その名前をもつ人物は出来事に関わった祖先の生まれ変わりだと見なされるため (de Laguna 1960: 18)、歴史中の出来事は現実と深く結びつく。歴史が場所に刻まれて鮮明に記憶されること、場所が人々を過去と結び付けるものであることを的確に示し、トリングット文化研究のその後の進展に寄与することになった。

## 4 ノーラ・ダウエンハウアーとリチャード・ダウエンハウアーの研究

### 4.1 先住民の視点に立った研究

20世紀半ばまでに、トリングットの多くの口承物語が記録されたものの、意味解釈まで掘り下げた研究は現れなかった。また、収集された物語も、英語に翻訳された概要が示されるのみで、口承の形式に言及する研究はなかった。このため、研究に協力してきたトリングットの人々は「これは自分が語った物語ではない」と不満を抱えていた (Dauenhauer and Dauenhauer 1995: 92)。英語に書き直された物語では、先住民族にとって重要な情報がすべて失われていたからである (Dauenhauer and Dauenhauer 1995: 92)。

欧米の研究者のためだけではなく、トリングット社会が受容できる、より正確な研究が必要だという考えに立って、従来の研究方法を問い直して研究を発展させたのがリチャード・ダウエンハウアーとノーラ・マークス・ダウエンハウアーである。ダウエン

ハウアー夫妻は研究のガイドライン<sup>6)</sup>を規定し、1970年代初頭から40年以上にわたって、トリンギットの口承物語とスピーチ（演説）の録音、記録、翻訳、研究を続けたが、その際に口承物語やスピーチをありのままに記録することに努めた。

ダウエンハウアー夫妻の専門性や生い立ちも研究に大きな影響を与えた。リチャード・ダウエンハウアーは文学と言語学を専門としてアラスカ大学サウスイースト校教授を務めた。一方、ノーラ・ダウエンハウアーはトリンギット社会で生まれ育ち、トリンギット語を母語とし、文化人類学と言語学に精通する研究者であった。ともに、詩人・作家という顔もち、リチャードはアラスカ州桂冠詩人（1981-1988年）に、ノーラはアラスカ州桂冠作家（2012-2014年）に選ばれている。世界文学をはじめとする専門分野の該博な知識を駆使しながら、先住民の視点に立ってまとめられた研究成果は、『わたしたちの祖先 (*Haa Shuká, Our Ancestors: Tlingit Oral Narratives*)』(Dauenhauer and Dauenhauer eds. 1987), 『わたしたちのスピリットを癒すために (*Haa Tuwunáagu Yís, for Healing Our Spirit*)』(Dauenhauer and Dauenhauer eds. 1990), 『わたしたちの文化—トリンギットのライフ・ストーリー (*Haa Kusteeyí, Our Culture: Tlingit Life Stories*)』(Dauenhauer and Dauenhauer eds. 1994) の大著3部作に結実した。

#### 4.2 ダウエンハウアーの口承文学研究3部作

『わたしたちの祖先』は、トリンギット民族にとって重要な物語15篇を抽出し、言語と伝統文化の詳細な解説を収録した、トリンギット口承文学の入門書である。トリンギット語による物語を左ページ、英訳を右ページに配した対訳が約250ページを占め、残りの250ページの中でトリンギット語の文法、物語のテーマや文化的背景、語り手の経歴等が解説されている。

『わたしたちのスピリットを癒すために』はトリンギットの記念式典での演説 (oratory) をまとめたものである。トリンギットの人々は、美しく、力強く、高潔な演説の言葉に大きな影響を受けると言われる (Dauenhauer and Dauenhauer eds. 1990: ix)。この著作では、1899年から1980年までの32人の演説が収められ、その社会的・文化的背景や記念式典の一般的構成や、その中で行われる歌や踊りや贈り物などの意味解説が付記されている。

また、『わたしたちの文化—トリンギットのライフ・ストーリー』はトリンギットの文化継承と政治に貢献した年長者53人の伝記に、トリンギットの社会制度や婚姻制度、歴史、文化理解のカギとなる概念等の説明が付け加えられている。年長者が語った自伝をまとめているが、実際には自伝というジャンルが自己中心的個人主義が際立つヨーロッパの産物であり、トリンギット文化にはなじまない。自分たちの人生を「特別なものではない」と考える年長者は語るのを嫌がったという (Dauenhauer and Dauenhauer eds. 1994: x-xi)。それでも、トリンギットの若い世代が継承すべきものとして、またトリン

ギット社会や政治の歴史を具体化する資料として (Dauenhauer and Dauenhauer eds, 1994: xi) 記録された。

### 4.3 ダウエンハウアーの研究の特徴

ダウエンハウアー夫妻の研究は、それまでの文化人類学分野の口承物語研究に比べて、以下の3点で顕著な特徴をもつ。まず、口承物語を一貫して文学として扱った点である。他の北米先住民の物語と同様に、トリンギットの口承物語は英語に翻訳され、リライトされる場合、しばしば子ども向けに編集されてきた<sup>7)</sup>。欧米人はもちろん、トリンギットの人々からも、それが好まれてきたからである。英語やアメリカの文化的価値にすでに同化したトリンギットの大人にとって、伝統的口承物語は彼らの現実とはかけ離れ、言語においても内容においてもはやトリンギットのものではなくなっている (Dauenhauer and Dauenhauer 1995: 98)。英語文化の文脈にあてはめて語り直された子ども向け文学がトリンギットの大人にとっても分かりやすく、受容しやすい。しかし、トリンギットの口承物語は本来「われわれ皆が必ず直面する、人間の境遇の多義性を扱った大人の文学」(Dauenhauer and Dauenhauer eds. 1987: ix) であり、それを子ども向けに矮小化することは、民族の知的・精神的価値を否定することであり、一種の人種差別主義といえる (Dauenhauer and Dauenhauer 1995: 98)。世界文学に精通した詩人・作家である夫妻はトリンギットの物語がもつ意味を解き明かしながら、文学的価値を主張した。また、年長者が語った物語について、トリンギット語の意味を吟味して英訳を行い、物語を新たな観点から検証することを可能にした。

第2の特徴は、先住民社会で育ったノーラ・ダウエンハウアーの貢献の大きさである。インタビューもトリンギット語で行うことが可能だったノーラは、伝統文化への深い理解に基づいた的確な質問で語り手の好奇心を刺激し (Dauenhauer and Dauenhauer eds, 1990: xvii-xviii)、忘れ去られていた様々な物語を思い出させることに成功した (Dauenhauer and Dauenhauer eds, 1987: 380)。のみならず、欧米研究者の間で浸透する誤解を先住民の視点から正した。たとえば、ポトラッチはチーフのクラン内での地位や権利を承認するといった社会的目的が欧米の研究者に強調されがちであるが、トリンギットから見れば、悲しみを取り除く精神的な癒しのための儀式だとして、精神的、宗教的側面の重要性を指摘している (Dauenhauer and Dauenhauer eds, 1990: xi)。

第3の特徴は、記録した物語を、従来の研究のように網羅的に公表しなかった点である。ダウエンハウアー夫妻が40年以上にわたって記録した膨大な数の物語はSHIに保管されているが、『わたしたちの祖先』で取り上げられるのはわずか15篇である。自分たちが大切にしてきた物語が、公表されて冒涇されるぐらいなら死を選択する方がよいといった年長者の思い (Dauenhauer and Dauenhauer eds, 1990: xviii) を伝えながら、トリンギットの物語は本来、網羅的に収集・公表できるものではないという事実を示唆してい

る。

同時に、厳選した物語を、できる限りありのままに再現することで、トリンギットの口承物語のあり様を初めて世に伝えることに成功した。語り手が誰で、登場人物とどういう関係にあり、起こった場所がどこかを明確に伝えることから物語は始まる (Dauenhauer and Dauenhauer 1995: 92-93; Dauenhauer and Dauenhauer eds. 1987: 324)。これは、民話では登場人物も場所も匿名だという通念を覆す (Dauenhauer and Dauenhauer 1995: 93)。また、トリンギット語の表現を読者に教え、たとえば動物や自然界の者に対して必ず用いられる婉曲表現 (Dauenhauer and Dauenhauer eds. 1987: 374, 392-393; 林 2013: 105-106) の背景にある倫理観など、リライトではかき消されてきた側面を伝えることに成功し、トリンギットの口承物語の解明を大きく前進させた。

## 5 現在の研究動向

### 5.1 マクレラン、クルクシャンク、ソーントン

デ・ラゲナと同時代に調査研究を行いながら、ダウエンハウアーと同様に口承物語解釈の研究で注目を浴びたのがキャサリン・マクレラン (Catherine McClellan) である。マクレランは、多くのアラスカ先住民族が語り継いできた「クマと結婚した娘 (The Girl Who Married the Bear)」の話に焦点をしぼり、トリンギット4人を含むユーコン・インディアン11人からこの同じ物語を聞き取り、それぞれの語り手によって異なる内容を13のヴァージョンとして表した (McClellan 1970)。そして、心理学的解釈などを試みて内容の意味やテーマを読み解き、「優れた文学作品」(McClellan 1970: 1) であることを示した。

ダウエンハウアー以降の口承物語研究では、実証研究から理論研究を発展させて注目を浴びてきたのがジュリー・クルクシャンク (Julie Cruikshank) である。カナダのユーコン準州に長年暮らし、1970年代から1980年代にかけて、アサバスカン・トリンギットの女性年長者3名から聞き取った物語と、彼女たちのライフストーリーを発表しながら (Cruikshank 1990, 2005; Sidney, Smith, and Dawson 1977; Sidney 1983; Smith 1982)、単純に見える口承物語の複雑な構造を指摘して、深層の意味解明に取り組んでいる。

クルクシャンクが調査を行うセント・エライアス山地帯は、混血の語り手たちが示すように、アラスカ沿岸部のトリンギットと内陸のアサバスカンの人々が交易や婚姻関係によって関係を築いた場所であり、記録された物語からは地域間の物語の伝播の跡をたどることができる点でも有用である。

クルクシャンクの著作の中で最も注目を集めてきたのが『氷河は聞いているのか (Do Glaciers Listen?: Local Knowledge, Colonial Encounters, and Social Imagination)』(Cruikshank 2005) である。年長者たちが氷河について話す際に、氷河をわがままで怒りやす

く、鋭い嗅覚をもつ生き物として語ることを指摘し、欧米とは異なる特有の自然観を指摘した (Cruikshank 2005: 8; 69)。そして、親近感をもって語っていた氷河の話が、いつの間にか自分自身の経験の話と一体化していく様子や、氷河の変化の話が実は同時に社会の変化を語っている可能性を指摘しながら、自然史と文化史は絡み合っているというトリンギット特有の世界観を反映した、口承物語の複雑な構造や物語の深層の意味に迫っている (Cruikshank 2005: 243-259)。

また、トマス・ソーントン (Thomas F. Thornton) は、地名研究という側面から口承物語の意味に関する重要な指摘を行っている。ソーントンはアラスカ南東部で3,400以上のトリンギット語地名の発掘を行い、地名に圧縮された歴史的、社会的、地勢学上の意味を解明してきたが、口承物語を場所 (place) との関連で解読する必要性を提唱している。たとえば、トリンギットの代表的物語「サケの少年 (Salmon Boy)」はシトカを舞台としているが、ソーントンはスワントンの記録した物語をシトカの年長者とともに検証している。物語各場面が実際にシトカのどの場所で起きたかを内容や文脈から推定し、17ヶ所を特定してみせた (Thornton 2008: 73-80; Thornton ed. 2012: xx-xxi)。具体的な場所との関連が明らかになることで、物語が本来伝えようとしていた意味が鮮明になることを示し、物語にはまだ多くの解読されていない情報や意味が隠されていることを証明している。

これらの新たなアプローチ法の一方で、儀式というコンテキストから物語の意味解明を行ってきたのがセルゲイ・カーン (Sergei Kan) である。カーンは物語や演説や歌が披露される伝統的儀式を徹底して研究してきた。25年以上に及ぶ調査研究の中で3つのコミュニティで13の儀式に参加しながら、トリンギット独特のコスモロジーや終末観への理解を深め、トリンギットの埋葬の儀式がもつ複雑な意味を解明した。たとえば、死者の名前を明確にせず、その死を悼む歌は、同じような状況で亡くなったクランの祖先とその死者を結び付ける効果があり、クランの調和や団結、母系集団の不滅性 (Kan 2016[1989]: 136) といったトリンギットの重要理念を表すことにつながる。また、埋葬儀式の宗教的意味と政治的意味の相関も指摘する。class 制のトリンギット社会では、死者から受け継ぐ有形・無形の財産が家系の子孫にとって最も価値ある政治的資源 (Kan 2016[1989]: 282) であり、死者を悼む儀式が、その子孫のアイデンティティや権力や名声維持に必要なことを指摘する。カーンの指摘は、儀式という文脈の中で物語内容を把握する必要性を改めて教えている。

## 5.2 歴史物語の記録

この他に物語分析や理論研究には発展していないものの、年長者が語った物語の出版が続いている。ジェフ・リア (Jeff Leer) はカナダとアラスカの国境にまたがるタク・リヴァー地域に暮らす女性年長者エリザベス・ナイマン (Elizabeth Nyman) が語った物

語を、1970年代から1980年代にかけて記録して出版した (Nyman and Leer 1993)。地域の歴史やナイマンのライフストーリーが語られているが、個人の話と不朽の話、目に見えるものと見えないもの、自伝と神話の間をいきつもどりつする話は2つの世界が区別されるものではなく相関関係にあることを示す。人間の歴史と自然の歴史は異なっているものの、不可分の関係にあるという伝統的なトリンギットの歴史観を表しており、クルクシャンクの指摘と共通する。

また、ウィリアム・ルイス・ポール／アカ・シュクインディ・ティーヒットン (William Lewis Paul (aka Shquindy TEE-HIT-TON)) は先住民の公民権獲得のために、1920年から活躍した弁護士であるが、彼も両親から聞いた物語を表した (Paul 2011)。物語はトリンギットの移住、各クランの発展と分裂、ロシア人との闘いなど民族の歴史に関する物語であり、祖先の1つのグループは北米大陸から海岸線に沿って北上してたどり着いたことや、トリンギットの「ギット」がツィムシアン語であるようにツィムシアン語を話す民族の一部だったことなども記されている。(Paul 2011: 16)

### 5.3 アラスカ先住民文学のアンソロジー

20世紀末にはトリンギットを含めたアラスカ先住民全体の口承文学アンソロジーも出版されるようになった。『増補版 アラスカ先住民作家、ストーリーテラー、演説者 (Alaska Native Writers, Storytellers and Orators, The Expanded Edition)』(Spatz ed. 1999)は、口承物語だけでなく、口承伝統の上に才能を開花させた現代作家・詩人の作品も所収し、アラスカ先住民文学という一つのジャンルの特徴を概観できるようになっている。各民族の口承物語や作品の文化的背景に関する解説や、口承と文字文化の差異 (Schneider 1999: 274-276)、翻訳にまつわる問題 (Meade 1999: 271-273) も解説され、アラスカ先住民文学入門書となっている。

また、アサバスカンの家系に属すジョン・スメルサー (John E. Smelcer) はアラスカ大学フェアバンクス校に設立されたアラスカ先住民言語センターの支援を得て、トリンギットとアサバスカンとエスキモーの3グループの物語のアンソロジーを発表している (Smelcer 1992)。文献研究から得られた物語と、先住民からの聞き取りによって収集した物語60篇が英語で綴られているが、出版市場に多く流通するリライト版と異なり、研究者による査読を受け、内容の真実性が確認されている点や、これまで発表されたことがない物語が含まれている点が特徴である。

日本においては、益子待也がトリンギットやツィムシアンなど北米北西沿岸インディアンに共通して見られる異界訪問譚研究を発表している。動物の側に立って考える、彼らの複合的な視点を指摘し、「食べる／食べられる」などの行為の意味や人間と動物の関係を考察して、物語の意味解釈に迫っている (Mashiko 1993; 益子 1993)。また、林はリチャード・ダウエンハウアーとノーラ・ダウエンハウアーの研究を基盤としてトリン

ギットの口承物語に見られる自然観と日本のそれとの共通性や、トリンギットの伝統的自然観が地球環境問題の深刻化する世界においても重要性を指摘している（林 2013; 2019）。

## 6 まとめ

本論文では、19世紀から現在までのトリンギット口承物語を扱った主要研究の内容をまとめながら研究の変遷を概観した。20世紀初頭までのクラウス、エモンズ、スワントンの研究はトリンギット語話者が激減する以前に貴重な記録を残した点が注目に値する。特にスワントンの研究は、正確かつ詳細な物語内容の記録であり、後代の物語研究の基礎となっている。

また、デ・ラグナは、トリンギットの物語がもつ歴史的側面を指摘し、聞き取った物語をもとに、特に20世紀初頭までのクラン同士の戦闘の歴史などを明らかにした。また、動物と人との異類婚姻譚のような「神話」とされる物語も、トリンギットにとってはクランの重要な歴史であることを指摘し、トリンギットの物語の本質を解き明かした。

そして、1980年代後半から1990年代に入り、ノーラ・マークス・ダウエンハウアーとリチャード・ダウエンハウアーが、先住民の視点に立った研究方法によって、口承物語研究を大きく発展させた。先住民社会との深い親交の中で積み重ねた記録と研究は、従来の研究からは完全に切り捨てられてきた「声」の部分、つまり、語りの方法を詳述し、トリンギットの口承物語とは何かを初めて具体的に示した。ダウエンハウアーの研究以降、物語の本来の語りの形を記録しながら、口承物語の複雑な構造そのものへの注目や、シンプルに見える物語内容の深層にある意味解明への研究が進んでいる。

このように見てくると、トリンギットの物語研究は、急速に失われていく物語の記録の努力であるとともに、口承物語とは何かが明らかになる過程であったといえる。別言すれば、トリンギットの物語が、欧米の価値基準に基づく学術研究に、「物語」の定義の再考や、従来の研究方法の見直しを迫る過程でもあった。今後は先行研究を基盤にして、主に2つの課題に向き合うことで研究の発展が期待できる。

1つは、物語に未解明のまま眠っている意味の解明である。ソートンが物語の各場面の場所を特定し、場所との関係で意味を考察することで、「サケの少年」が単なる教訓的物語ではなく、サケの生態をサケの視点で正確に伝えていることを明らかにしたように、伝統的な物語にまだ引き出されていない重要な情報が残っている可能性はある。スワントンの記録した物語を活用して検証する必要がある。

もう1点は、1つの物語に存在する多様な版の研究である。従来の研究では、各版の共通する内容に焦点があてられ、トリンギットという民族特有の伝統文化、倫理観、自然観などが明らかにされてきた。しかし、実際には、クラン間で異なる内容の中にこそ

クラン独自の重要な情報が隠れている可能性がある。SHIに所蔵された物語と、物語に精通した年長者からの聞き取り調査をもとに、これまでよく知られてきた物語についても、改めて多様な版の差異の部分について検証を進める必要があると思われる。

## 注

- 1) 2010年のセンサスでは、トリンギット・ハイダの人口が26,080人（他の民族との混血も含む）となっている（United States Census Bureau Website）。トリンギットのみ人口は16,771人（University of Pennsylvania Museum of Archaeology and Anthropology Website）とされるが、各機関によって発表データに違いがある。
- 2) たとえばデ・ラグナは1950年にアングーンでフィールドワークを行ったが、そのときには「伝統的な先住民芸術は事実上アングーンでは死滅している」（de Laguna 1960: 16）と述べている。伝統的バスケットを作成できる女性はほんの数人で、木彫師や銀細工師はおらず、家の正面の絵や彫刻も消されているか壊れており、チーフが修理する価値があると判断しても修理ができる者を遠方まで探さなければならなかったという（de Laguna 1960: 16）。
- 3) この本は*Die Tlinkit-Indianer*という書名で1885年にドイツで出版され、英訳の初版が1956年に刊行された。
- 4) 冒頭の献詞「トリンギットの人々へ」の中でデ・ラグナは次の文を入れている。「ここに記された、あなたがたのもとを訪れた人たちの意見を読んで、不当である、あるいは失礼だと感じたときには、思い出して下さい。どれほど懸命に努めたとしても完璧な人間などおらず、偏見のない観察者などいないのです」（Emmons 1991: v）。
- 5) 白人によるトリンギット史の年代区分は、1. 先史時代（18世紀のヨーロッパ人との邂逅以前）、2. 古代（1741年のアラスカ発見から18世紀後半）、3. 近代（1867年の米国によるアラスカ購入以降）の3区分である。一方、先住民の物語は1. 神話に属する時代（世界が現在の形になることを示す物語）、2. 伝説の時代（現在のクランの起源や移住の歴史を語る物語）、3. より時代が明確な歴史物語（クラン同士の争いや探検家のエピソードなど）、4. 現代（親族や語り手が生きている時代に起こったこと）の4区分であると指摘している。
- 6) ダウエンハウアー夫妻がガイドラインとしてきたこととして、以下の7項目を挙げている。特定のパフォーマンスにおいて年長者を特定できる場合は叙述すること、トリンギット語で文字化すること、オリジナルのスタイルに注意を払って翻訳すること、口承文学をまじめな大人の文学として扱うこと、物語を表現しているトリンギットの視点に敬意を払うこと、注釈や序文を用いて文化的背景を完全に説明すること、伝統継承者がフィールドワーカーやその場の聴衆に話す際に彼らが知っていると前提にしているもので、読者には分からないことは明確にすることを挙げている。
- 7) 子供向けに語り直した出版物の代表例として、ダウエンハウアーはベックの著作（Beck 1989; 1991）を挙げている（Dauenhauer and Dauenhauer 1995: 93）。この2冊はスワントンの物語をもとにしているが一切出典を示していない。また、トリンギットの口承スタイルやストーリーテラーのことに触れていないだけでなく、本来のトリンギットの物語を完全にリライトしているため、聴衆／読者に解釈の自由もないなど問題があることを指摘している。



## 参照文献

### <和文>

林子恵子

- 2013 「アラスカ先住民民族クリンギットの口承伝統——『わたしたちの祖先』をもとに」『多民族研究』6: 93-114。
- 2019 「極北の化学物質汚染——狩猟採集民の自然観を理解する」伊藤詔子・一谷智子・松永京子編『トランスパシフィック・エコクリティシズム——物語る海、響き合う言葉』pp. 191-205, 東京：彩流社。

益子待也

- 1993 「鮭の村を訪れた少年——北米北西沿岸インディアンの異界訪問譚」『口承文芸研究』16: 29-48。

### <欧文>

Beck, M. L.

- 1989 *Heroes and Heroines: Tlingit-Haida Legend*. Portland: Alaska Northwest Books.
- 1991 *Shamans and Kuhtakas: North Coast Tales of the Supernatural*. Anchorage and Seattle: Alaska Northwest Books.

Cruikshank, J.

- 1990 *Life Lived Like a Story: Life Stories of Three Yukon Native Elders*. Collaborated with A. Sidney, K. Smith, and A. Ned. Lincoln: University of Nebraska Press.
- 2005 *Do Glaciers Listen? Local Knowledge, Colonial Encounters, and Social Imagination*. Vancouver: UBC Press.

Dauenhauer, N. M.

- 2002 Tlingit: Have Patience: Some Things Cannot Be Rushed. In R. Corral, W. Mayo, D. Campbell, W. Charles, R. L. T. Ramoth-Sampson, P. Kelly, N. M. Dauenhauer, S. Haakanson, Jr., D. Boxley, G. Noongwook, J. Breinig, and D. Lankard. *Alaska Native Ways: What the Elders Have Taught Us*, pp. 62-71. Portland: Graphic Arts Center Publishing Co.

Dauenhauer, N. M. and R. Dauenhauer (eds.)

- 1987 *Haa Shuká, Our Ancestors: Tlingit Oral Narratives*. Seattle and London: University of Washington Press and Juneau, AK: Sealaska Heritage Foundation.
- 1990 *Haa Tuwunáagu Yís, for Healing Our Spirit: Tlingit Oratory*. Seattle and London: University of Washington Press and Juneau, AK: Sealaska Heritage Foundation.
- 1994 *Haa Kusteeyí, Our Culture: Tlingit Life Stories*. Seattle and London: University of Washington Press and Juneau, AK: Sealaska Heritage Foundation.

Dauenhauer, R. and N. M. Dauenhauer

- 1995 Oral Literature Embodied and Disembodied. In U. M. Quasthoff (ed.) *Aspects of Oral Communication* (Research in text theory 21), pp. 91-111. Berlin: de Gruyter.

de Laguna, F.

- 1960 *The Story of a Tlingit Community: A Problem in the Relationship between Archeological, Ethnological, and Historical Methods* (Bureau of American Ethnology, Bulletin 172). Washington DC: Government Printing Office.

- 1972 *Under Mount Saint Elias: The History and Culture of the Yakutat Tlingit*, 3 Vols. Washington DC: Smithsonian Institution Press.
- Emmons, G. T.  
 1991 *The Tlingit Indians* (American Museum of Natural History Anthropological Papers, Vol. 70). Edited with additions by F. de Laguna. Seattle and London: University of Washington Press.
- Kan, S.  
 2016[1989] *Symbolic Immortality: The Tlingit Potlatch of the Nineteenth Century*. Seattle and London: University of Washington Press.
- Krause, A.  
 2013[1956] *The Tlingit Indians: Observations of an Indigenous People of Southeast Alaska 1881-1882*. Translated by E. Gunther. Kenmore. WA: Epicenter Press.
- Mashiko, M.  
 1993 Eating and Being Eaten: Animals in the Mythological Imagination of the Northwest Coast Indian Peoples. In Hokkaido Museum of Northern Peoples (ed.) *The Proceedings of the 7th International Abashiri Symposium: Animals in the Spiritual World of Northern Peoples*, pp. 27-34. Abashiri: The Association for the Promotion of Northern Cultures.
- McClellan, C.  
 1970 *The Girl Who Married the Bear* (National Museum of Man, Publications in Ethnology, No. 2). Ottawa: National Museums of Canada.
- Meade, M.  
 1999 Translation Issues. In R. Spatz (ed.) *Alaska Native Writers, Storytellers and Orators*. The Expanded Edition, pp. 271-273. Anchorage: Alaska Quarterly Review.
- Nyman, E. and J. Leer  
 1993 *Gágiwduł.àt: Brought Forth to Reconfirm: The Legacy of a Taku River Tlingit Clan*. Whitehorse: Yukon Native Language Centre and Fairbanks: Alaska Native Language Center.
- Paul, W. L. (Aka Shquindy TEE-HIT-TON)  
 2011 *The Alaska Tlingit: Where Did We Come From?: Our Migrations, Legends, Totems, Customs and Taboos*. San Bernardino, CA: Trafford.
- Rogers, K.  
 1998 Discrimination, a Reality in Alaska. In S. B. Andrews and J. Creed (eds.) *Authentic Alaska: Voices of Its Native Writers*, pp. 132-133. Lincoln and London: University of Nebraska Press.
- Schneider, W.  
 1999 Considerations about the Oral Tradition and Writing. In R. Spatz (ed.) *Alaska Native Writers, Storytellers and Orators*. The Expanded Edition, pp. 274-276. Anchorage: Alaska Quarterly Review.
- Sidney, A.  
 1983 *Haa Shagóon: Our Family History*. Compiled by J. Cruikshank. Whitehorse: Yukon Native Languages Project.
- Sidney, A., K. Smith, and R. Dawson  
 1977 *My Stories Are My Wealth*. Recorded by J. Cruikshank. Whitehorse: The Council for Yukon

- Indians.
- Silko, L. M.  
 1986 *Landscape, History, and the Pueblo Imagination*. In D. Halpern (ed.) *On Nature: Nature, Landscape, and Natural History*. San Francisco: North Point Press.
- Smelcer, J. E.  
 1992 *The Raven and the Totem*. Anchorage: A Salmon Run Book.
- Smith, K.  
 1982 *Nindal Kwäindür: "I'm Going to Tell You a Story."* Recorded by J. Cruikshank. Whitehorse: The Council for Yukon Indians and the Government of Yukon.
- Spatz, R. (ed.)  
 1999 *Alaska Native Writers, Storytellers and Orators*. The Expanded Edition. Anchorage: Alaska Quarterly Review.
- Swanton, J. R.  
 1908 *Social Conditions, Beliefs, and Linguistic Relationships of the Tlingit Indians* (Twenty-sixth Annual Report, Bureau of American Ethnology), pp. 391–485. Washington DC: Government Printing Office.  
 1909 *Tlingit Myths and Texts* (Bureau of American Ethnology, Bulletin 39). Washington DC: Government Printing Office.
- Thornton, T. F.  
 2008 *Being and Place among the Tlingit*. Seattle and London: University of Washington Press.
- Thornton, T. F. (ed.)  
 2012 *Haa Léelk'w Hás Aaní Saax'ú: Our Grandparents' Names on the Land*. Juneau, AK: Sealaska Heritage Institute and Seattle and London: University of Washington Press.
- Williams, M. S. T.  
 2009 *A Brief History of Native Solidarity*. In M. S. T. Williams (ed.) *The Alaska Native Reader: History, Culture, Politics*. Durham and London: Duke University Press.
- Worl, R.  
 2010 *Tlingit*. In A. L. Crowell, R. Worl, P. C. Ongtooguk, and D. D. Biddison (eds.) *Living Our Cultures, Sharing Our Heritage: The First Peoples of Alaska*, pp. 200–215. Washington DC: Smithsonian Books.

<ウェブサイト>

Encyclopedia Britannica Online

John Reed Swanton. <https://www.britannica.com/biography/John-Reed-Swanton> (accessed October 5, 2021)

United States Census Bureau

The American Indian and Alaska Native Population: 2010. <https://www.census.gov/history/pdf/c2010br-10.pdf> (accessed October 5, 2021)

University of Pennsylvania Museum of Archaeology and Anthropology

The Louis Shotridge Digital Archive: Tlingit Art, Culture, and Heritage. [https://www.penn.museum/collections/shotridge/the\\_tlingit.html](https://www.penn.museum/collections/shotridge/the_tlingit.html) (accessed October 5, 2021)